

第 章 分析と考察

小牧野遺跡における縄文後期前半の土器編年について

1. 分析の視点

本遺跡における縄文後期の土器は、「第 群土器」として区分し、さらに 6 類型に分類してきた。分類の基準は、主要文様や区画文様を構成する単位文様の沈線端部の結合関係によるもので、文様のかたちを細分化したものではない。沈線端部の結合関係による分類は、平成10年度に刊行した報告書（青森市教育委員会1998）が初出で、本報告書の土器の記載にあたっても使用している（第7図）。

本遺跡における編年案については、過去にも提出されている（児玉1999）が、これまでの調査による共伴事例の増加により、より具体的に検討することが可能となった。

ここでは、小牧野遺跡の形成から終焉、環状列石の構築時期や使用期間を考える際の前提となる土器編年について、これまでに本遺跡で検出された各種遺構の共伴関係をもとに考えるものとする。

2. 単位文様の分類について（図1）

型式指標の一つとなる主要文様は、複雑・多岐にわたりモデル化されることが多いが、主要文様や区画文様を構成する単位文様は、比較的単純に理解することができ、かつ時間的に変化しやすい要素の一つとして土器の変遷指標にもなりうる。

単位文様の分類は、沈線の結合関係によるもので、基本的には三群に分類、うち一群が 3 類型に細分される。分類の内容は第 章の第7図でも説明しているが、ここでは模式図（図1）をたどって説明する。

1群 単線によるものである。

「C字状文」「S字状文」「山形文」「弧状文」「渦巻文」「蛇行文」などが認められる。

2群 沈線の両端が連結するもの、あるいは他の単位文様に接し、結果的に沈線の端部が連結するものである。

「円形文」「楕円形文」「長楕円形文」「方形文」「長方形文」「三角形文」などが認められ、1群と重複する名称には、その語頭に「連結」を付した。「連結C字状文」「連結S字状文」「連結渦巻文」などが認められる。

3群 単位文様の屈曲部や端部が、そのほかの単位文様と結合し同体化しているものである。本群の単位文様を認定するにあたり、沈線のみを目で追って文様を観察しようとすると、どの部分が単位文様なのか見失う、あるいは見当がつかなくなる場合も多い。単位文様同士が密着していたり、縄文や櫛歯状沈線などの施文効果により、単位文様の反転化が考えられるからである。本群は、前記の縄文や櫛歯状沈線が施される部分を基準として単位文様を認めることとし、2群の「連結

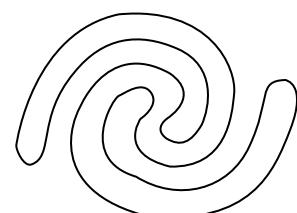
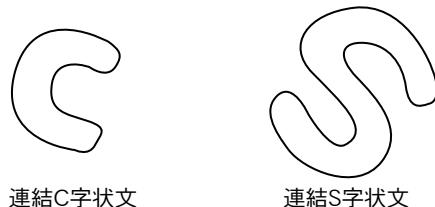
文」と区別するため、語頭に「連携」を付し、混乱を回避した。「連携渦巻文」「連携S字状文」「連携曲線文」「連携コ字状文」などが認められる。さらに、単位文様と隣接する空間の幅や、単位文様の展開方向によって、次の a ~ c 類に細分される。

a類 単位文様の幅が、次の b 類と比較して広く、また隣接する空間が単位文様と同じ位の幅で構成されるもの。

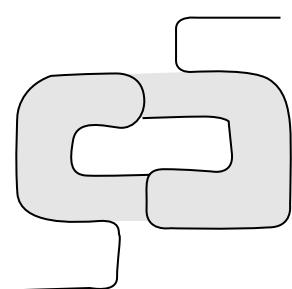
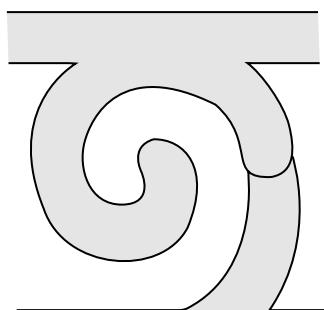
単位文様 1群



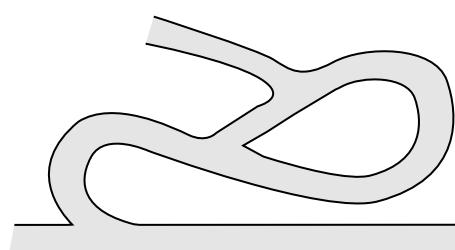
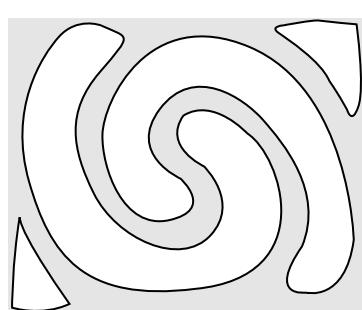
単位文様 2群



単位文様 3群a類



単位文様 3群b類



単位文様 3群c類

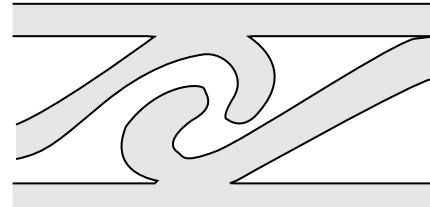
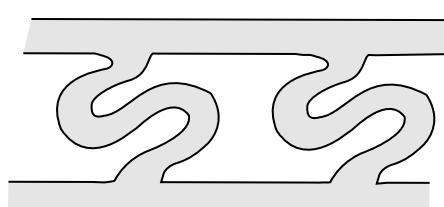


図1 単位文様の分類

- b 類 単位文様の幅が、前記の a 類と比較して狭く、また隣接する空間の幅と比べてみても幅狭のもの。
- c 類 結合する単位文様が横位に展開するもの。

3. 事例分析（図2～10）

以上のように分類した単位文様は、土器が型式として変化していくうえで密接に関連する要素の一つとして理解される。これらの単位文様は有意な変遷指標であり、層位学的方法および共伴関係の確認を行うことによって、より具体的な内容を明らかにできるはずである。分析にあたっては、各遺構の共伴事例を対象とし、前記で分類された単位文様を中心に記述する。

事例1：第1号遺物集中ブロック（図2）

捨て場から出土した一括資料である。単位文様第3群 a 類の連携渦巻文や連携コ字状文など（1～3、7・8）が施される土器が主体的で、単位文様第3群 b 類の渦巻文など施される土器もわずかに見られる（4）。また、撚糸圧痕による格子目文をモチーフとする土器も出土している（5）。

事例2：竪穴住居跡・第2号遺物集中ブロック（図3）

本事例は、住居跡とした遺構の堆積土より出土した資料である。各堆積土は、一次堆積 二次堆積 三次堆積 四次堆積 第2号遺物集中ブロックの順での推移が認められる。

土器の共伴関係は、住居跡を覆う一次～二次堆積（4～6層）では、単位文様3群 a 類の連携長方形文（2・3）や連携C字状文あるいは曲線文（6）連携斜線文あるいは三角形文（1）など施される土器が出土している。

三次堆積土（2～3層）では、単位文様3群 b 類の連携S字状文（7、9）や三角形文や弧状文などで構成されるもの（12）弓矢や樹木を抽象した文様が連携するもの（10）など施される土器が出土している。

四次堆積土（1層）では、単位文様2群の楕円形文や円形文（14・15）3群 b 類の連携弧状文あるいはうろこ状文（13）3本組沈線手法によるS字状文あるいは渦巻文（16・17）など施される土器が出土している。

第2号遺物集中ブロックでは、単位文様2群の楕円形文や円形文、連結S字状文（20、23）連結渦巻文（22、26）3本組沈線手法による渦巻文（25）3群 c 類の連携S字状文？（27）など施される土器が出土している。

事例3：第5号遺物集中ブロック（図4）

捨て場から出土した資料である。平面分布では a～d の概ね4つのブロックに分けることができる。垂直分布では、a、b ブロックについては有意な層位的重複は認められず、ほぼ同一時期に形成されたものと推定され、d ブロックについては、土器の分布が概ね2層を呈する有意な層位的重複が認められた。その下層がd 1 ブロック、上層がd 2 ブロックである。各ブロックは、d 1 ブロック a～c ブロック d 2 ブロックの順での推移が認められる。

土器の共伴関係は、d 1 ブロックでは、単位文様3群 b 類の連携C字状文や三角形文、長方形文などが施される土器（1・2）が出土している。

a ブロックでは、単位文様2群の連結C字状文や連結S字状文などの渦巻文系の主要文様が施される土器（3、10）が多く出土している。また、同一時期として推定されるc ブロックにおいても、単位文

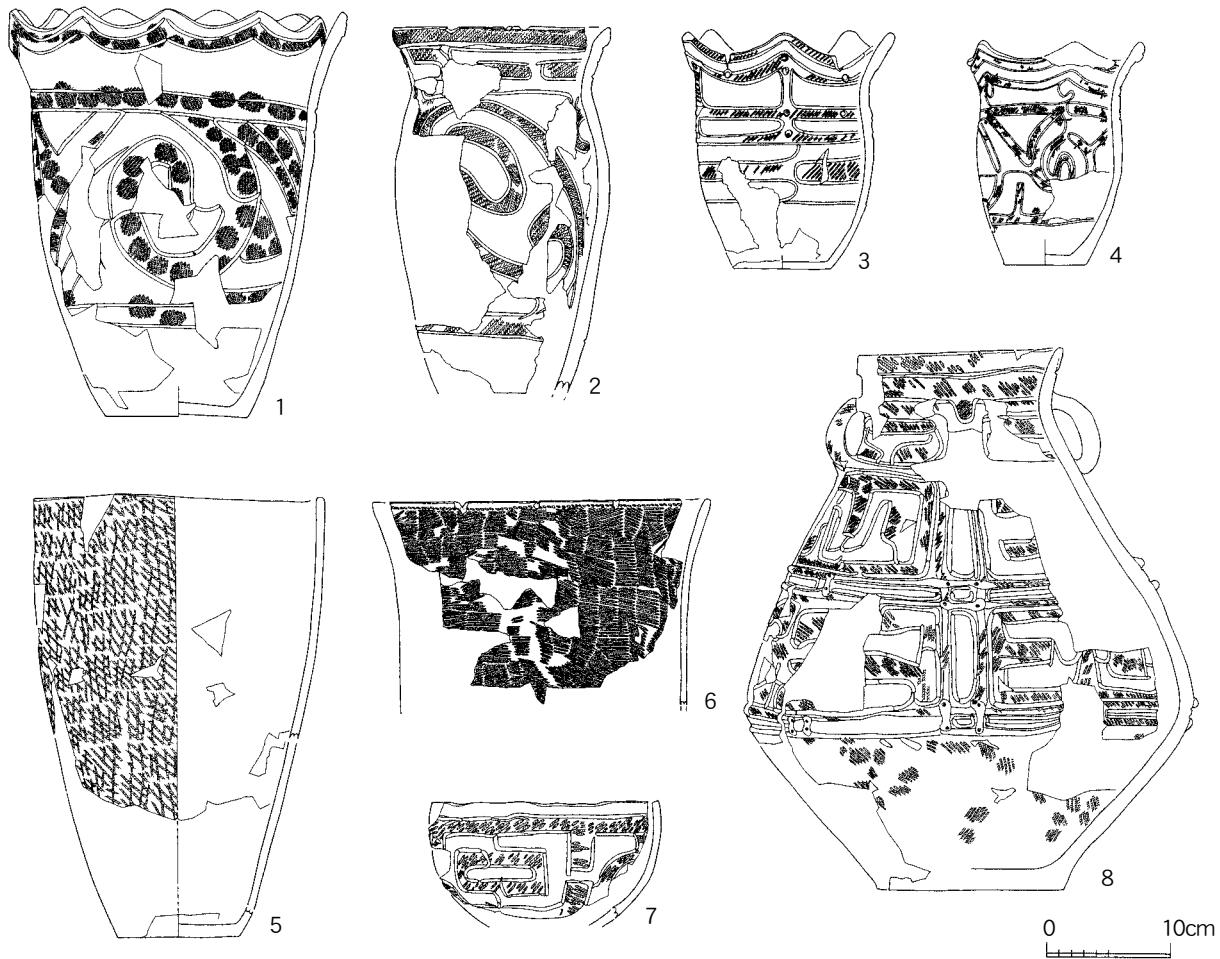


図2 事例1：第1号遺物集中ブロック（青森市教育委員会1996）

様2群の連結S字状文やC字状文などの渦巻文系の主要文様が施される土器（12・13）が出土している。

d 2ブロックでは、3本組沈線によるS字状文が施される土器（17、19）や単位文様3群c類の連携渦巻文（15）や連携S字状文（20）櫛歯状沈線手法による連携S字状文、連携渦巻文（14、16）などが施される土器（14、16）が出土しており、単位文様3群c類の方が主体的である。また、櫛歯状沈線手法による格子目文をモチーフとした土器も出土している（21）。

事例4：第1号竪穴住居跡（図5）

第1号竪穴住居跡の覆土より出土した資料である。

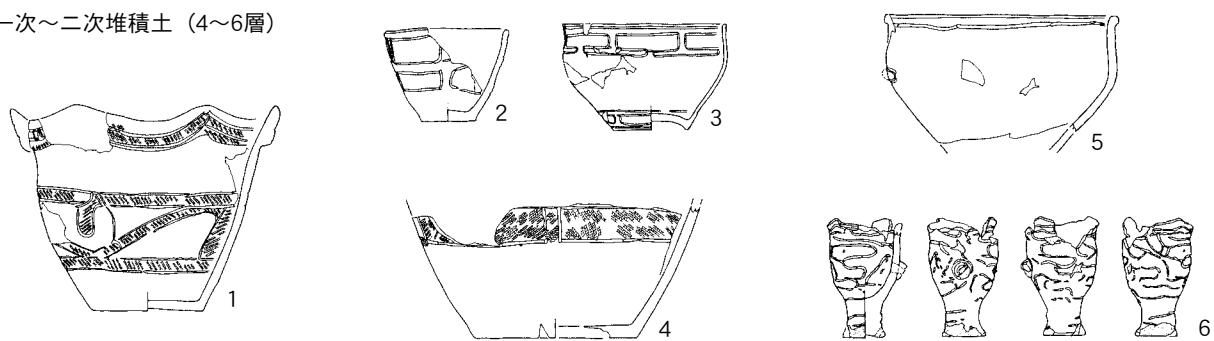
土器の共伴関係は、3本組沈線手法によるS字状文や弧状文など（2～4）が主体的であるが、単位文様第2群の隆沈線手法による土器（5）も出土している。

事例5：環状列石内の盛土（図6）

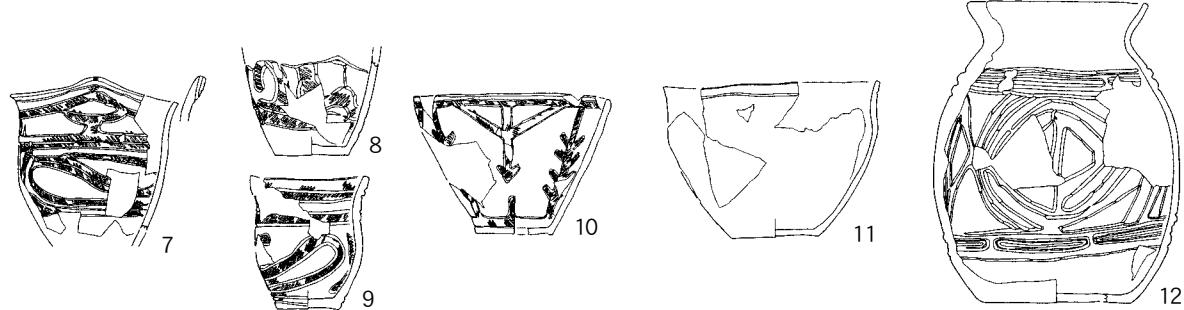
環状列石の石を配置する前に構築された盛土上面より出土した資料である。

共伴関係は、単位文様2群の円形文や長楕円形文の区画文様、連結S字状文や渦巻文系の主要文様が施される土器（1、2、4、10、11）が主体的である。また、撲糸圧痕による格子目文をモチーフとする土器も出土している（7・8）。

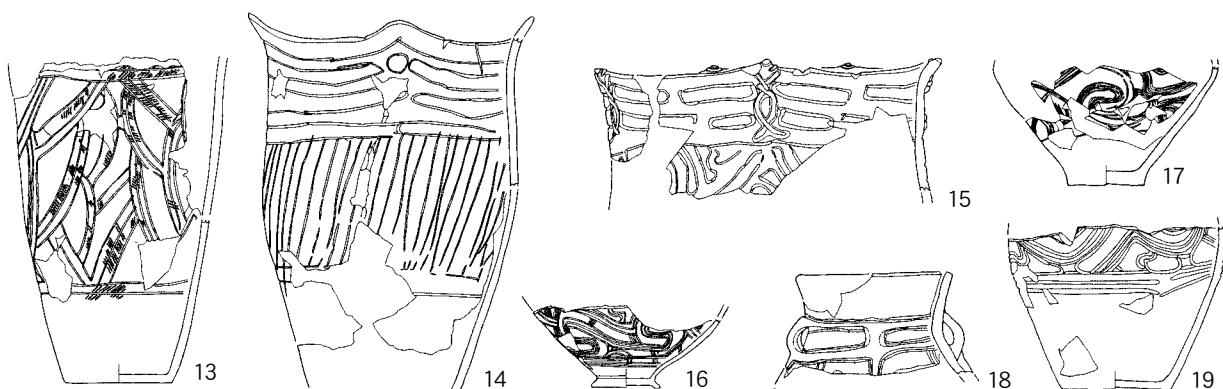
一次～二次堆積土 (4～6層)



三次堆積土 (2～3層)



四次堆積土 (1層)



第2号遺物集中ブロック

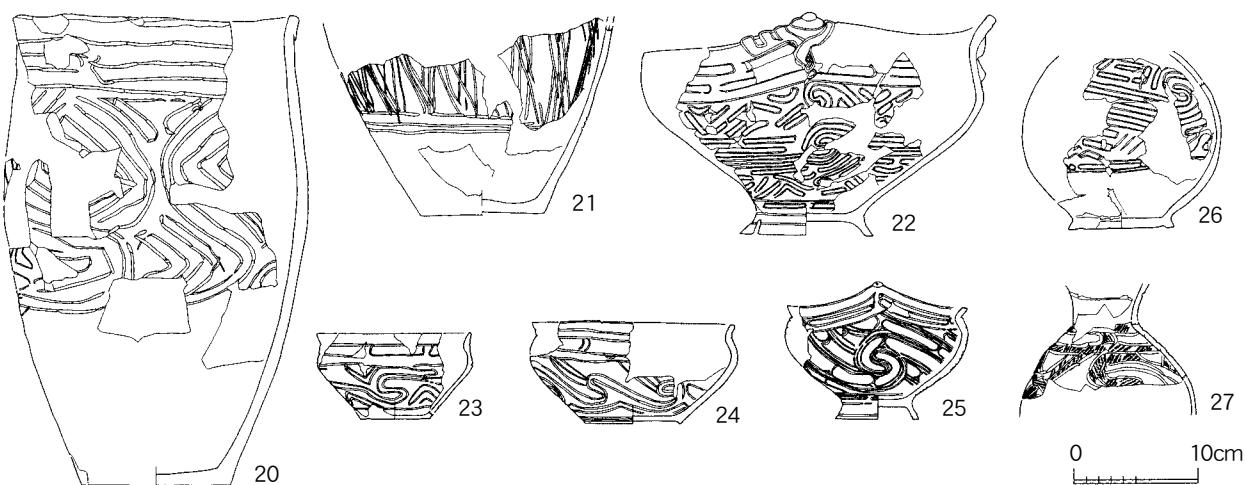


図3 事例2：竪穴住居跡・第2号遺物集中ブロック（青森市教育委員会1996）

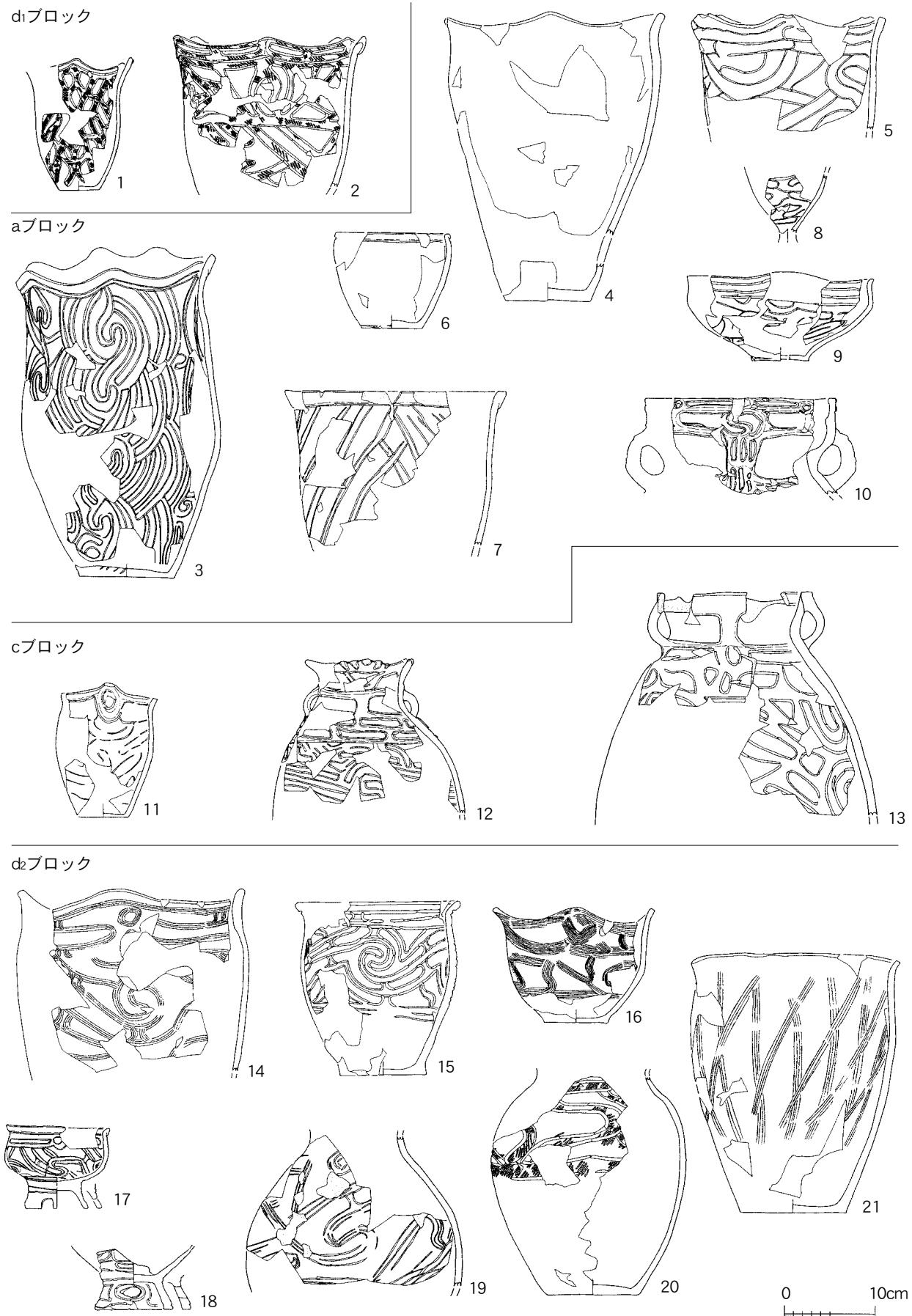


図4 事例3：第5号遺物集中ブロック

事例6：環状列石内の土器棺墓（図7）

環状列石の内帯と外帯の間から出土したもので、時系列的には、前記の盛土 環状列石（内帯・外帯）の構築 土器棺墓の順となる。

土器棺No. 1は、セット関係にある土器で、単位文様2群の円形文や長楕円形文の区画文様（3）と渦巻文系の主要文様が施されるもの（1）3本組沈線手法によるS字状文が施されるもの（2）である。

土器棺No. 2は、単位文様2群の渦巻文系の主要文様（4）と沈線手法による格子目文をモチーフとした土器（5・6）である。

土器棺No. 3は、単位文様2群の渦巻文系の主要文様が施される土器（7）である。

事例7：土坑（図8・9）

土坑の覆土中より出土した資料である。

SK-46は、単位文様3群b類を主体とする土器が出土している（1～9）。

SK-37、41、52は、単位文様2群の連結C字状文や連結渦巻文、連結S字状文など（10、11、13、14、16、29）施される土器が主体的である。また、撫糸圧痕（28）および沈線手法（15）による格子目文をモチーフとする土器も出土している。

SK-48A、43、50、61は、単位文様2群の長楕円形文や連結渦巻文、連結C字状文、連結弧状文など（17、22、24、32、35）と、3本組沈線手法によるS字状文、渦巻文など（20～23、25、26、36）が施される土器が出土している。

SK-44Aは、単位文様3群c類の連携波状文？など（38）が施される土器が出土している。

事例8：三つ重ね土器（図10）

遺構外より、三つ重ねの状態で出土した土器である。2セット出土している。

No. 1は、単位文様2群の長楕円形文が施された土器が2点（1・2）3本組沈線手法による渦巻文系の主要文様が施される土器が1点（3）の構成となっている。

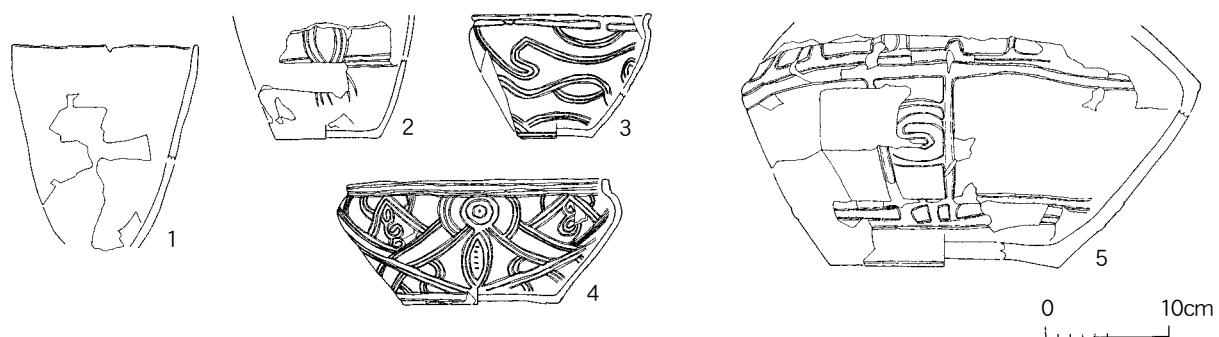


図5 事例4：第1号竪穴住居跡（青森市教育委員会2001）

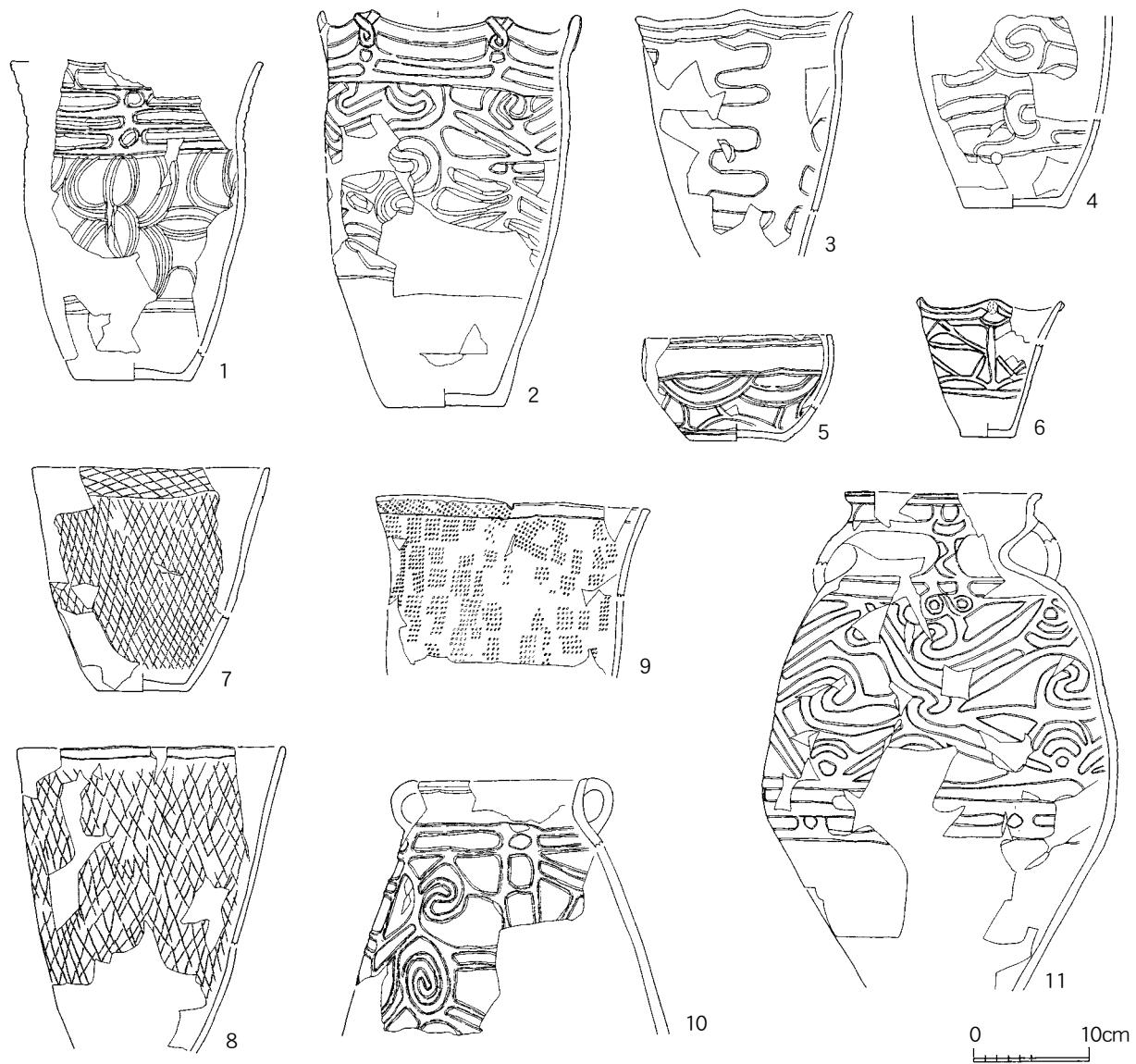


図6 事例5：環状列石内盛土（青森市教育委員会2001）

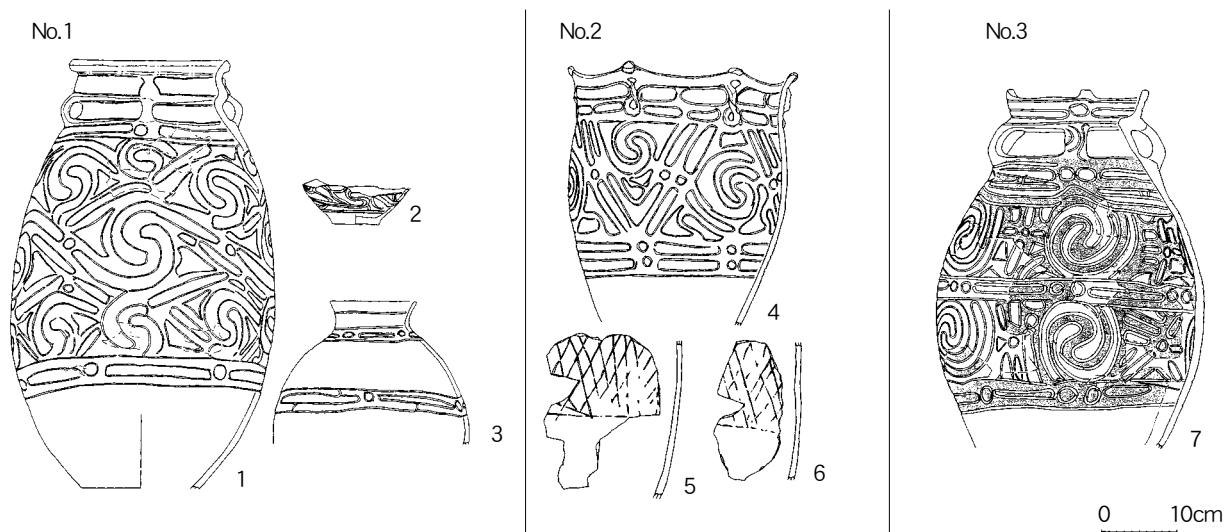


図7 事例6：環状列石内土器棺墓（葛西・高橋1990）

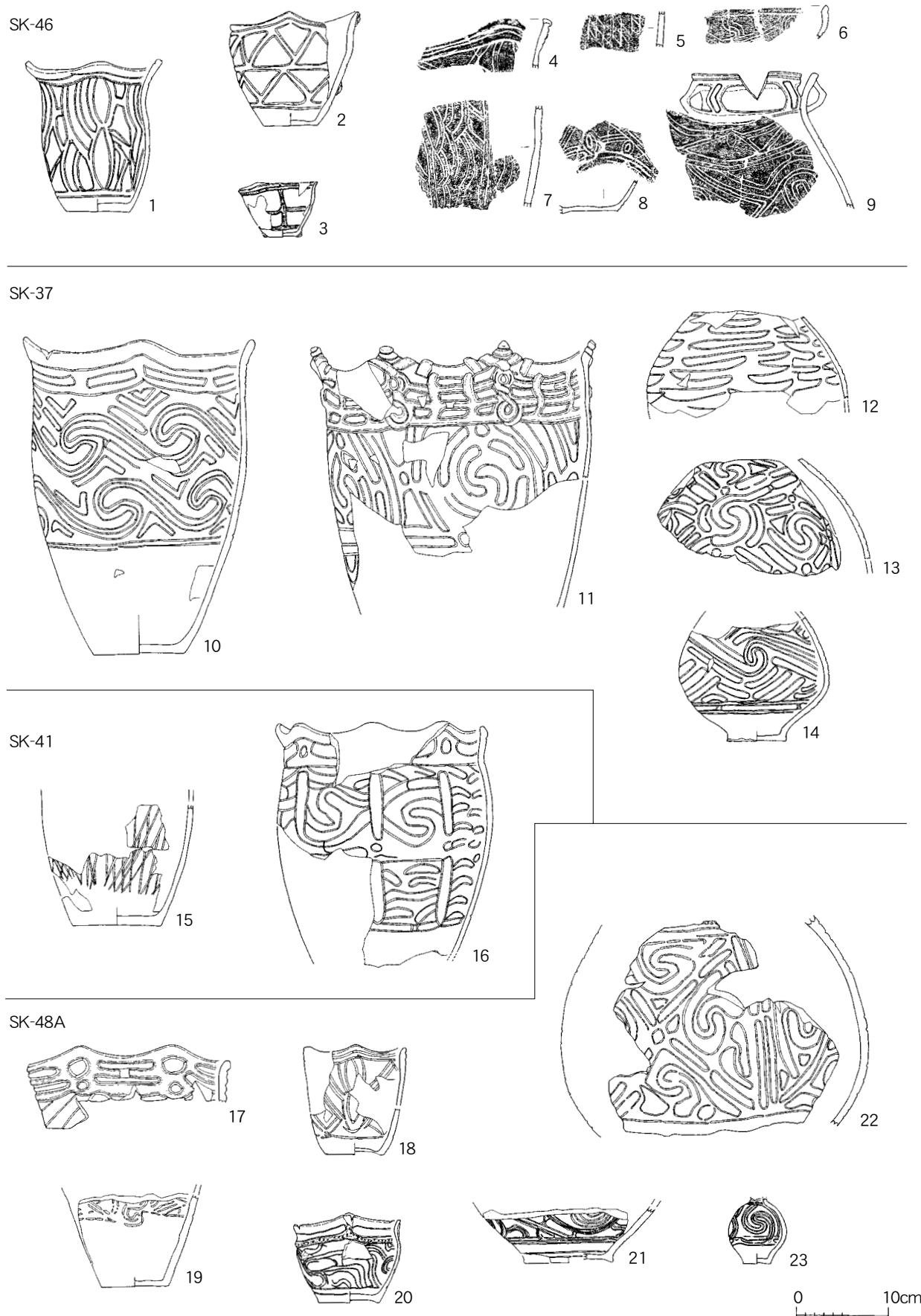


図8 事例7-1：土坑（青森市教育委員会2002）

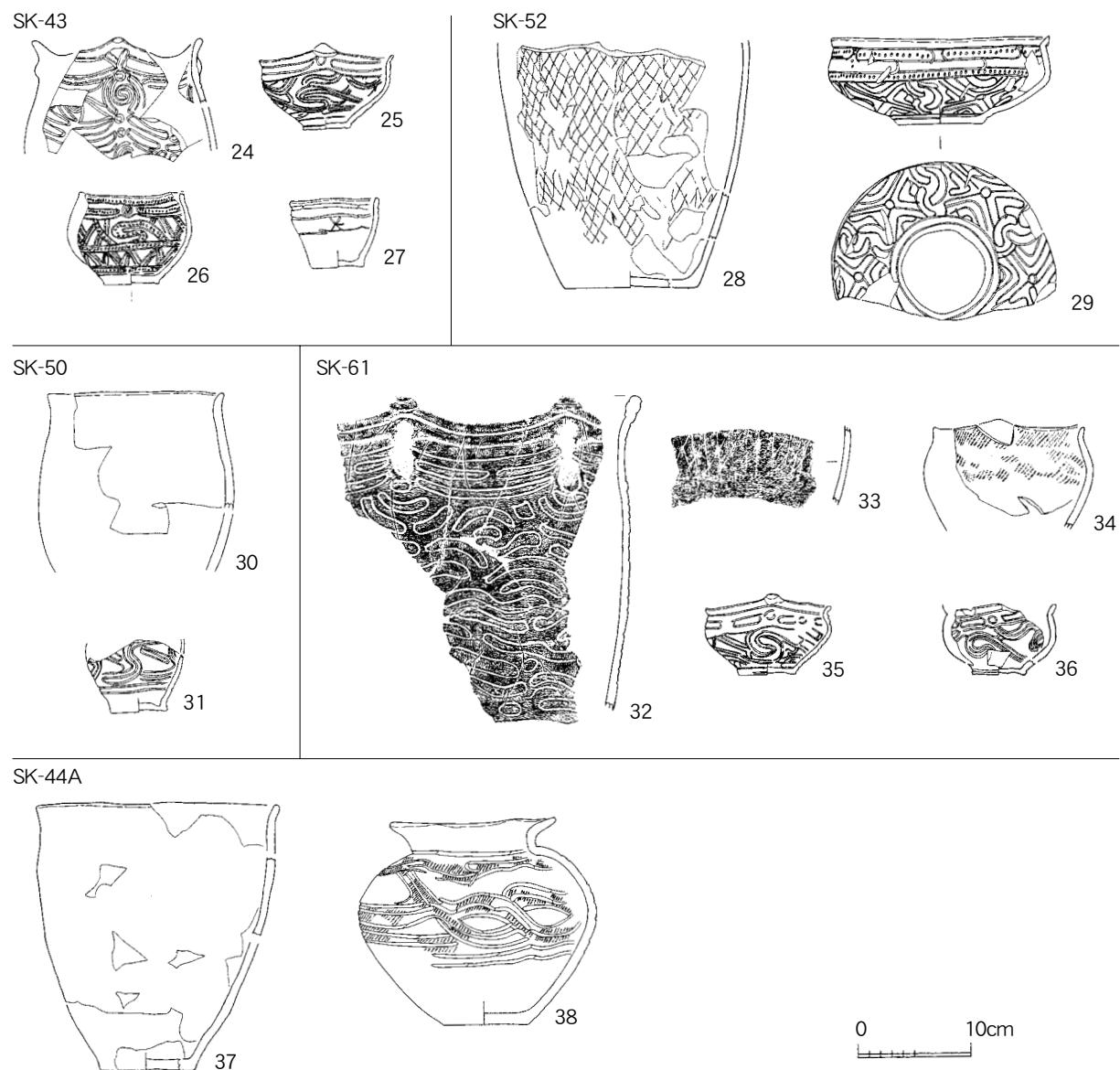


図9 事例7-2：土坑（青森市教育委員会2002）

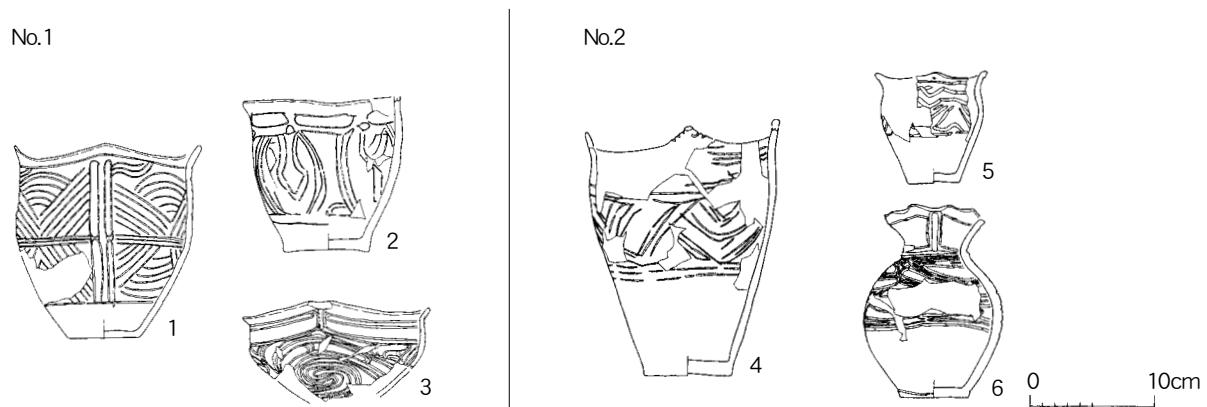


図10 事例8：三つ重ね土器（No.1：本報告書、No.2：青森市教育委員会1996）

No. 2 は、3 本組沈線手法による山形文（横位展開）が 1 点（4）単位文様 3 群 c 類の横位に展開する主要文様が 2 点（5・6）の構成となっている。

4. 単位文様の変遷と時期区分（図11～13）

前項の各事例の推移の過程を整理（図11）すると、その上限では、第1号遺物集中ブロック・竪穴住居跡より単位文様3群a類に求めることができ、次に3群b類が位置付けられる。下限では、第5号遺物集中ブロックより単位文様3群c類に求めることができ、単位文様3群b類とc類の間に単位文様2群が位置付けられる。また、3本組沈線手法による土器は、第2号および第5号遺物集中ブロックより、単位文様2群と3群c類の間に位置付けられる。以上のような様相は、各事例の共伴関係が示すように、部分的に併行しつつも、単位文様3群a類 3群b類 2群 3本組沈線手法 3群c類の順で時系列的に並ぶことが理解できる。

渦巻文系の主要文様を例にとると下記のような変遷の過程がうかがえる（図12）。

単位文様3群a類から3群b類にかけては、単位文様の幅狭化（反転して見た場合には幅広化）が考えられる。

単位文様3群のb類から2群にかけては、単位文様の反転化（縄文などによる強調部の減退）が考えられる。

事例	単位文様 (時期区分)	3群a類 (2期)	3群b類 (3期)	2群 (4期)	3本組沈線 (4～5期)	3群c類 (5期)
1. 第1号遺物集中ブロック						
2. 竪穴住居跡・第2号遺物集中ブロック	覆土4～5層					
	覆土2～3層					
	覆土1層					
	集中ブロック					
3. 第5号遺物集中ブロック	d1ブロック					
	aブロック					
	cブロック					
	d2ブロック					
4. 第1号竪穴住居跡						
5. 環状列石内盛土						
6. 環状列石内土器棺墓	No. 1					
	No. 2					
	No. 3					
7. 土坑	SK-46					
	SK-37					
	SK-41					
	SK-48A					
	SK-43					
	SK-52					
	SK-50					
	SK-61					
	SK-44A					
8. 三つ重ね土器	No. 1					
	No. 2					

図11 各事例における共伴関係

単位文様 2 群から 3 本組沈線手法にかけては、再び単位文様の反転化（3 本組沈線による強調）が考えられる。

3 本組沈線手法から単位文様 3 群 c 類にかけては、施文手法の多様化（櫛歯状沈線手法などの沈線の多条化、縄文による強調）が考えられる。

また、3 本組沈線手法を採用せず、単位文様 2 群から 3 群 c 類にかけて変遷するものも認められ、単位文様の連携と横位展開への変化が考えられる。

以上のような単位文様は、図13に示すごとく明確な区分をもって変遷するのではなく、前後が併行しながら段階的に変遷するものと考えられる。また、単位文様 2 群と 3 群 c 類は連続して変遷するものと考えられるが、両者の間に間層的に 3 本組沈線手法による単位文様が含まれるものと考えられる。したがって、上記の単位文様を時期的に区分すると（1 期を除く）単位文様 3 群 a 類が「2 期」、単位文様 3 群 b 類が「3 期」、単位文様 2 群が「4 期」、単位文様 3 群 c 類が「5 期」となり、3 本組沈線手法が 4 期と 5 期の過渡期の土器すなわち「4～5 期」として設定される。

また、本遺跡では、格子目文をモチーフとする深鉢形土器が割合多く出土しているが、この土器についても施文手法の変遷が認められる（図13）。撚糸圧痕によるものでは、2 期～4 期（単位文様 3 群 a、b、2 群）沈線（単線）によるものでは 4 期～5 期（単位文様 2 群、3 群 c 類）多条の沈線によるものでは 5 期（3 群 c 類）に伴って出土しており、沈線手法による単位文様を主要文様とする土器よりも継続的な様相を示している。

5. 各時期の土器様相（図14～17）

前項までに把握した単位文様と事例分析を踏まえて、これまで東北北部において設定された土器型式に比定させ、各時期ごとの器種、器形、主要文様等の様相について記述する。

1 期

本遺跡では破片で僅か 2～3 点にしか過ぎず、主要文様が読み取れる出土例は未だ無い。本間宏氏（1987）が上村式、成田滋彦氏（1989）が牛ヶ沢式（3）土器と呼称した時期に相当する。

2 期（1～10）

単位文様 3 群 a 類を主体とする土器群によって構成される。葛西勲氏（1979 a）が螢沢 3 群、成田氏（1989）が沖附（2）式土器と呼称した時期に相当する。

器種は、深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形土器で構成される。器形は、深鉢形や鉢形土器などの口縁部が肥厚しているものや折り返されるものがみられ、5～10 単位の波状口縁のものが目立つ。浅鉢形土器は器形が底部から口縁部まで膨らみを持つ器形が特徴的で平坦口縁のものが多い。

文様は、口縁肥厚部に、長方形文や波状口縁に沿った連結沈線（単位文様 2 群）が施される（1、3・4）。この口縁文様帶は 3 期までほぼ変化なく継続し（11・12、14など）、4 期になると 1 段下がり口縁の肥厚部直下に施される傾向にある（34～39、42など）。胴部には、幅広の連携沈線（単位文様 3 群 a 類）による渦巻文系（1）や方形・コ字状系（5、10）の主要文様が施される。これらの主要文様は、大柄に描かれることが多く、単位が 4 列・1 段～2 段の割り付けとなる傾向がみられる（1、10）。また、共伴する土器に、撚糸圧痕による格子目文が器面全体に施されるものもみられる（176～185 相当）。

3 期（11～33）

単位文様 3 群 b 類を主体とする土器群によって構成される。葛西氏（1979 b）が十腰内式第 2 段階



図12 漩巻文系の主要文様の変遷

沈線・隆沈線手法による単位文様を有する土器					格子目文をモチーフとする土器		
単位文様3群a類 (2期)	単位文様3群b類 (3期)	単位文様2群 (4期)	3本組沈線 (4~5期)	単位文様3群c類 (5期)	燃糸圧痕	沈線(単線)	沈線(多条)

図13 小牧野遺跡における土器の変遷

A種、鈴木氏（1998、2001）が馬立式後半および薬師前式と呼称した時期に相当する。

器種は、深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形土器で構成される。器形は、2期と同様に、深鉢形土器などの口縁部が肥厚しているものや折り返されるものがみられ、5~8単位の波状口縁のものが目立つ。浅鉢形土器は、2期では膨らみを持っていた胴部がやや直線的になり、鉢形に近い器形となる傾向がみられ、平坦口縁のものも割合多い。

文様は、2期と同様に口縁肥厚部に、長方形文や波状口縁に沿った連結沈線（単位文様2群）が施される（11、12、14など）。胴部には2期にみられた方形・コ字状系の主要文様が減退化、渦巻文系の主要文様が小型化（11、13~15）し、単位も4列~6列・1段~2段の割り付けとなる傾向にある。単位文様を観察するにあたり、縄文が施される部分とその外側の部分のどちらが単位文様なのか迷ってしまう土器が多いのもこの時期である。縄文により強調された部分を単位文様として認定しているが、反転して見た場合には4期の文様に類似した構図となる。

4期（34~114）

単位文様2群を主体とする土器群によって構成される。葛西氏（1979b）が十腰内式第2段階B種、成田氏（1989）が十腰内A式と呼称した時期に相当する。十腰内式土器の古相として理解される。器種は、深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形で構成される。器形は、深鉢形土器や鉢形土器などの口縁部が、前二期と比べて折り返されるものが少くなり、4~8単位の波状口縁のものが目立つ。浅鉢形土器は、胴上半部が屈曲したり、口縁部が外反するものが多くなり、口縁部が2~4単位の波状口縁と平坦口縁のものとがみられる。また、器面も丁寧に調整されるものが多くなり、色調も前の時期と比べると明るさを増していく。

文様は、2期・3期では口縁肥厚部に長方形文などが施されていたが、この時期では1段下がり、口縁の肥厚部直下に円形文や長楕円形文が施される傾向にある（34~39、42など）。また、深鉢、浅鉢、壺形土器の波状口縁の垂下部には円形や8字状の粘土紐が貼付されるものが目立つ。主要文様は、連結C字状文を互いに組合せたり、連結S字状文を変形させたりした渦巻文系の文様や、円形文、長楕円形文、三角形文などの副文様が組合わされる傾向にある（34~42、72~82、85~100など）。単位も6~8列・

2段～4段前後となり、前二期と比べると多列・多段化する傾向がみられる。3期の段階では、この単位文様の外側に縄文が施されるものが多かったが、本期ではこの手法が減退し、単位文様が反転化する。また、共伴する土器に、撚糸圧痕（176～185相当）および単線による沈線手法（186～192相当）による格子目文が器面全体に施されるものがみられる。2期の段階では、撚糸圧痕が主体的であったが、本期では沈線手法によるものが多くみられる。

4～5期（115～153）

3本組沈線手法を主体とする土器群によって構成される。4期と5期の間に位置付けられ、その前半期は4期、後半期は5期に含まれる可能性も考えられる。

器種は、深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形で構成される。器形は、深鉢形土器の波状口縁が6単位のものが多くみられるが、4単位のものも認められる（127）。

文様は、4期と同様に口縁肥厚部直下に円形文や長楕円形文が施される傾向にある。胴部には、3本組沈線手法による渦巻文系の主要文様がみられ（115、122、131、134～144など）。特に浅鉢形土器に多い。単位も4～6列・1～2段前後となり、主要文様が横位に展開するものが多くみられる（115、121～123、127など）が5期の文様ほど稚拙ではない。また、4期の段階では、連結する沈線（単位文様2群）が主体的であったが、当該期では、その外側に3本組沈線が施され、それらが連携した構図へと変化する。文様と口縁の形態に相関が認められ、口縁が4単位ものは5期の特徴である横位展開する主要文様（129、134）が施されている。

5期（154～175）

単位文様3群c類を主体とする土器群によって構成される。葛西氏（1979b）が十腰内式第3段階、成田氏（1989）が十腰内B式と呼称した時期に相当する。十腰内式土器の新相として理解される。

器種は、深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形、注口土器で構成される。器形は、深鉢形や浅鉢形土器の口縁部が、4期では6～8単位の波状口縁が多くみられたのに対し、本期では4単位のものが目立つようになる。また、浅鉢形土器では、高台が付くもの（167）もみられるようになる。

文様は、4期の口縁肥厚部直下にみられた円形文や長楕円形文の配置が少なくなる。胴部には沈線で縁どりされた単位文様内に櫛歯状沈線や縄文などが充填されるようになる。櫛歯状沈線は、4～5期の3本組沈線が多条化したものと考えられる。単位も4～6列・1段前後となり、稚拙な単位文様が連携しつつ横位に展開（単位文様3群c類）する傾向がみられる。また口縁部に刻目が施されるものや胴部に刺突文が施される土器もみられるようになる。共伴する土器に、多条沈線手法による格子目文が器面全体に施されるものがみられる（193・194相当）。

6. 十腰内式土器の直前型式 - 小牧野3期土器 -

（1）十腰内式直前の型式に関する略史

昭和33～36年にかけて調査された弘前市十腰内遺跡から出土した土器群は、磯崎正彦氏によって十腰内～群に細分され、東北北部の縄文後期の土器群を編年的に体系化し（今井・磯崎1968）。その群土器は十腰内式土器として理解された。

その後、葛西氏（1979a・b）により青森市螢沢遺跡から出土した土器群の編年案が発表され、十腰内式土器の前段階に螢沢3群土器が、さらに前段階に螢沢1・2群土器が位置付けられると提示された。成田氏は、葛西氏の編年観に近い立場（成田1986）をとっていたが、その後、螢沢1・2群に相当

する弥栄平(2)式を設定することにより螢沢3群と1・2群土器を逆転させた編年案を発表した(成田1989)。また、本間(1987)・鈴木(1998)氏は、これらが同一型式であるという編年案を発表した。

このように十腰内式の前段階の型式については編年上、安定した評価が得られていないのが現状である。

(2) 問題の所在

小牧野2期にあたる葛西氏の螢沢3群、成田氏の沖附(2)式土器は、両者とも型式的にはほぼ同じ内容で理解しているものと思われるが、葛西氏は螢沢3群(成田氏の沖附(2)式)の前段階に螢沢1・2群(成田氏の弥栄平(2)式)を位置付け、成田氏はその逆の編年観を示している。一方、本間氏と鈴木氏は、それらが同時に存在するものとして、それぞれ螢沢式(本間1987)と馬立式(鈴木1998)を提唱している。つまり、当該時期の編年観は、新旧逆の編年観をもった葛西氏と成田氏が時間的な差を持って変遷するという立場と、本間氏・鈴木氏の地域的に量的推移によって併存するという三つの立場が存在している。問題を複雑化しているのは、一定量の土器が包含された層位で新旧関係が確認された事例がないこと、当該型式の土器から十腰内式土器にいたるまでに主要文様の変遷過程に連続性を欠いていたことにほかならない。

(3) 螢沢3群と十腰内式を繋ぐ土器 - 小牧野3期土器 -

平成7年に調査した小牧野遺跡の土器群(事例2・図3)は、層位的に螢沢3群と十腰内式の間に、もう一型式存在する可能性が見出され(青森市教育委員会1996)児玉(1999)により「小牧野3期」の土器として設定され、螢沢3群(小牧野2期) 小牧野3期 十腰内式(小牧野4期)の順で系統的に型式変化するものとして提示された。また、螢沢1・2群と3群が同じ型式(馬立式)として理解してきた鈴木氏は、小牧野3期に近い内容の土器群を「馬立式後半」と認定し(鈴木1998)その後、薬師前遺跡の土器棺の共伴関係や小牧野遺跡の事例を取り上げて「薬師前式土器」として型式設定した(鈴木2001)。葛西氏は、『再葬土器棺墓の研究』の中で、螢沢1・2群を「螢沢一期」、螢沢3群を「螢沢二期」と改称し、螢沢一期と十腰内式期の間に「小牧野3期土器」を位置付けた(葛西2002)。また、成田氏は、葛西氏の編年と逆転の編年観を提示してきたが、平成14年に刊行された報告書『三内丸山(6)遺跡』の中で螢沢3群を「前十腰内式」と呼称し、さらに十腰内A式土器を～段階に3細分した(成田2002)。うち十腰内A式第一期が小牧野3期に近い内容であると思われる。

以上のように、小牧野3期に相当する土器群は、十腰内式土器の直前型式の土器、あるいは過渡期の土器として理解されつつあり、問題となっている前段階の型式(螢沢3群など)を検討する上で、重要な型式であると考えられる。

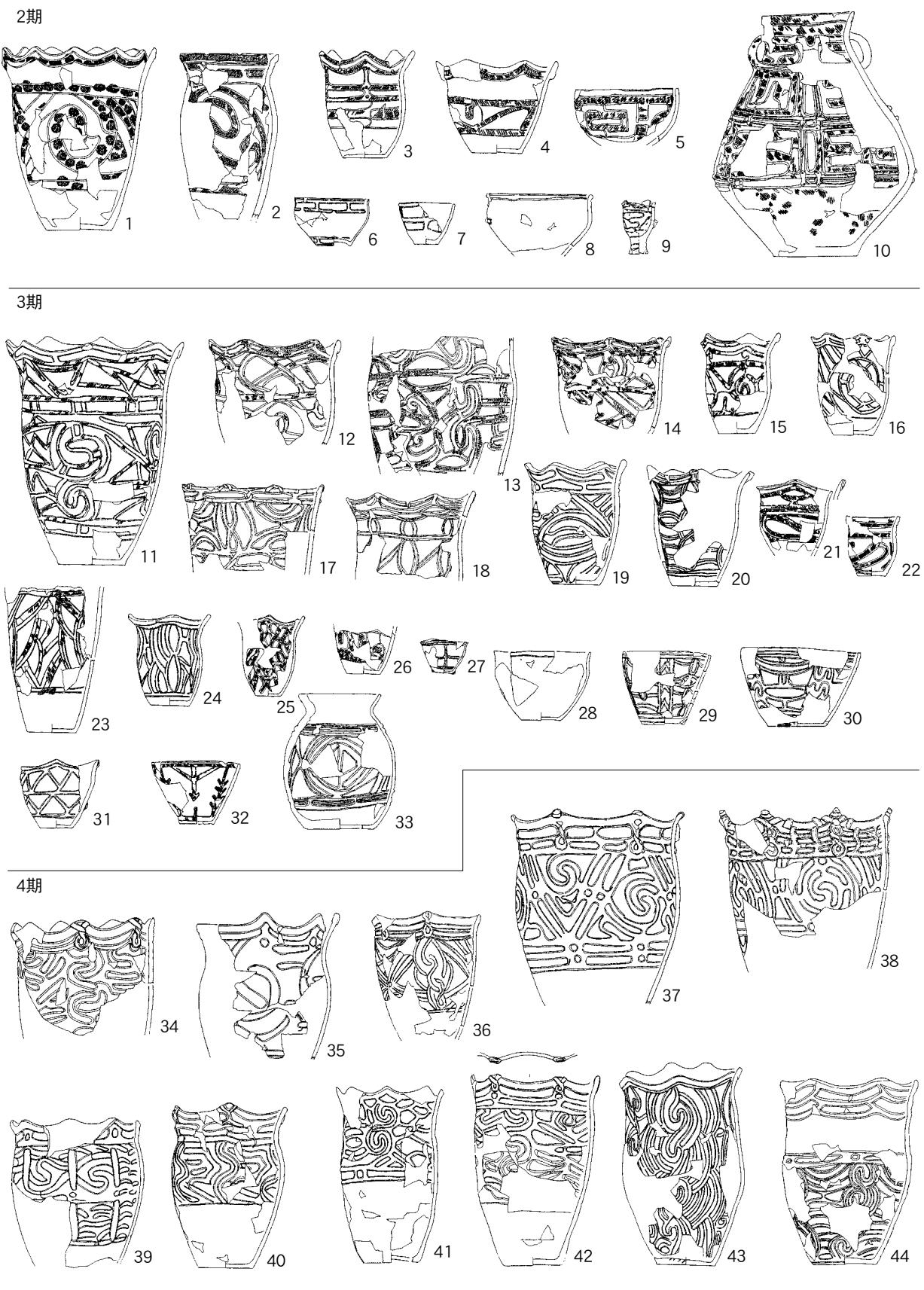


図14 小牧野遺跡における土器編年 (1)

4期

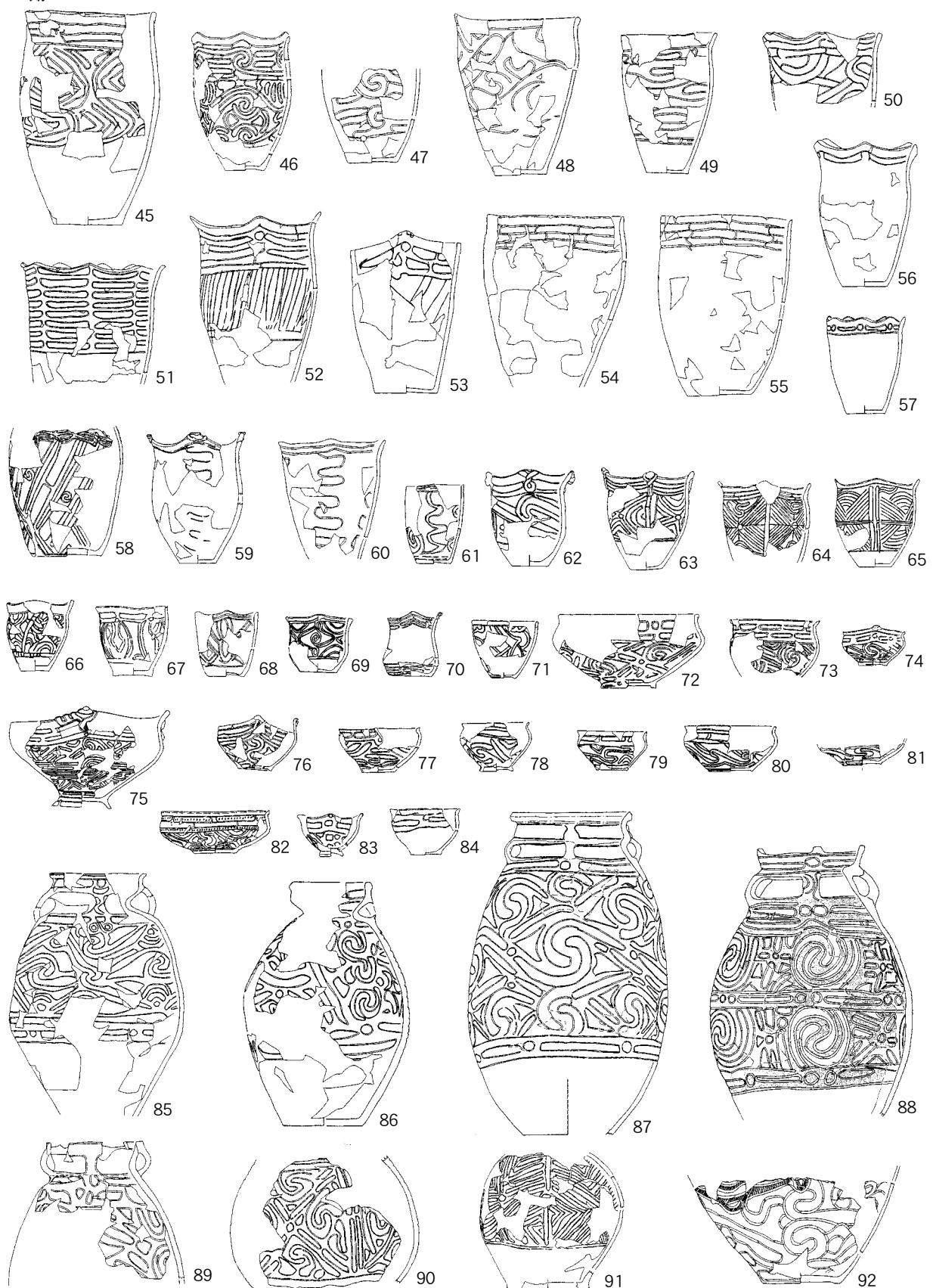


図15 小牧野遺跡における土器編年 (2)

S=1:10

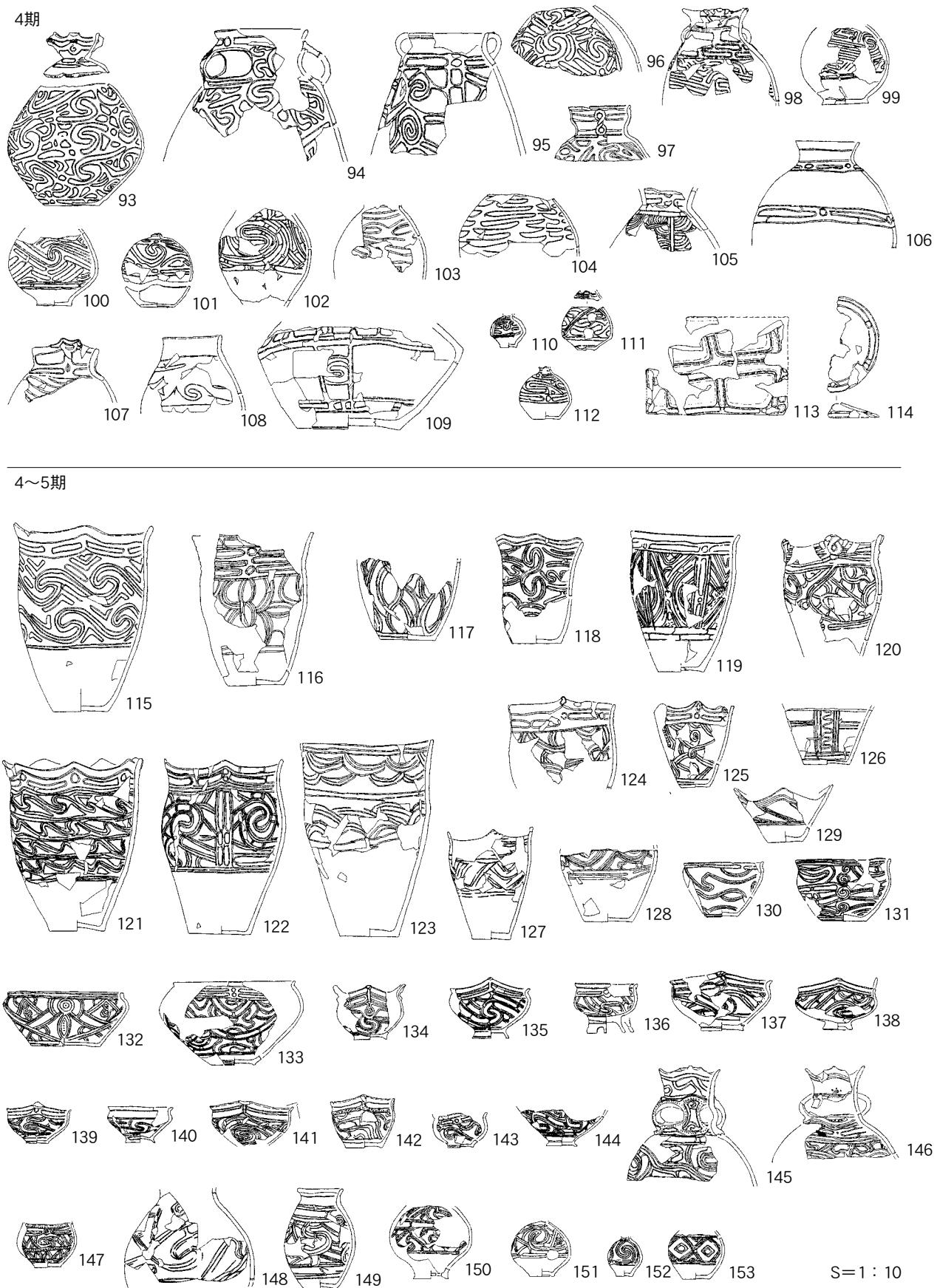


図16 小牧野遺跡における土器編年 (3)

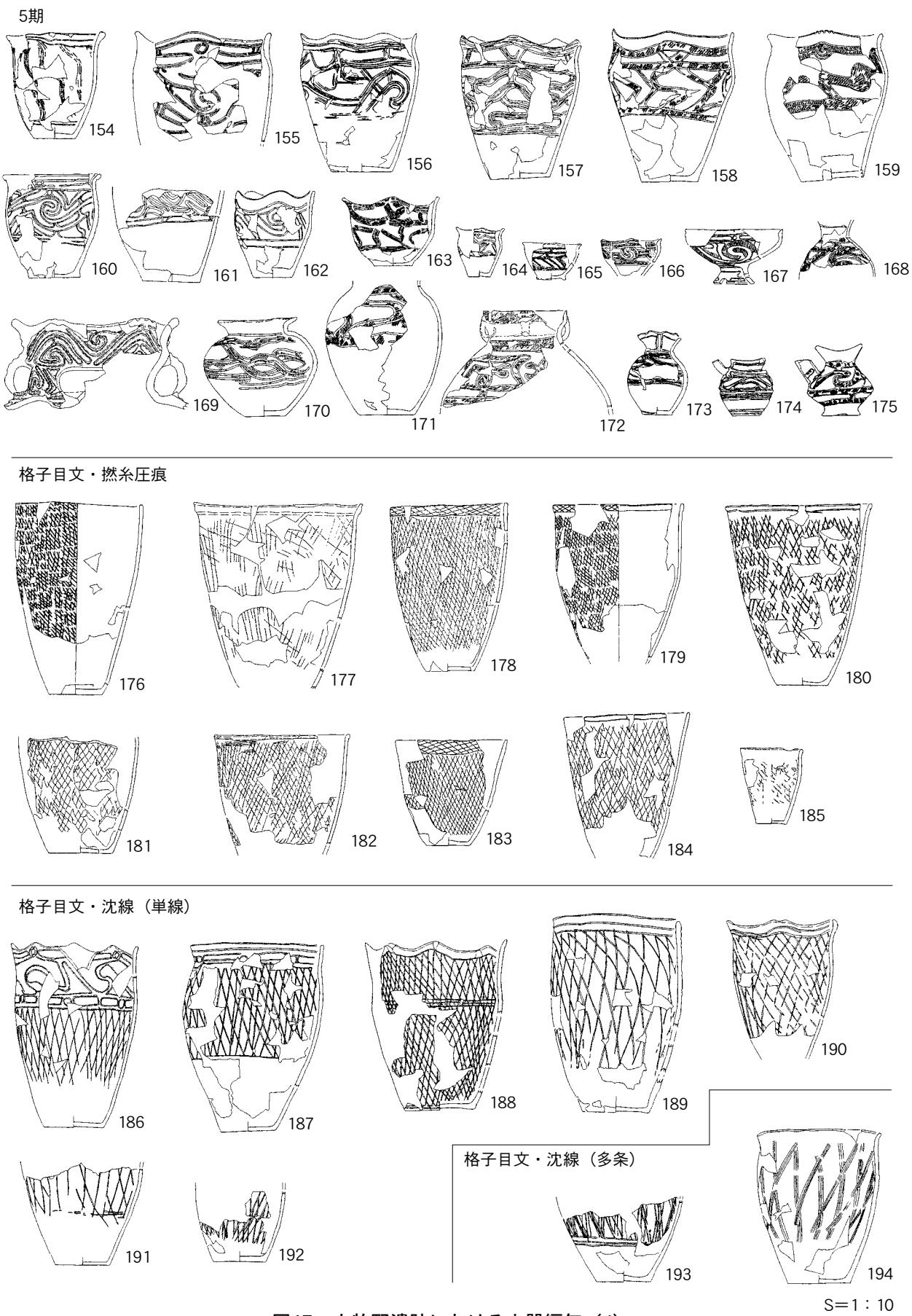


図17 小牧野遺跡における土器編年 (4)